

「ヘリコバクター・ピロリ感染症

Helicobacter pylori infection」

T.C. Northfield

M. Mendall

編集

P.M. Goggin

自治医科大学教授・消化器内科

木村 健

監訳

自治医科大学講師・消化器内科

谷口 友志

訳

自治医科大学消化器内科

佐藤 貴一

北海道大学教授・第3内科

浅 香 正 博

ヘリコバクター・ピロリに興味のある方には、何をおいてもお勧めしたい本の1つである。1982年4月14日、西オーストラリアのパース市の研究室で、これまで細菌が生息できないと言われていた胃粘膜から初めてらせん状の細菌が培養された。培養に成功した若い医師の名前は、当時無名で今は誰もが知っている Marshall である。どのサクセスストーリーにも偶然性がつきものであるが、彼の場合にも、オーストラリアの復活祭休暇が5日間あったという幸運が存在した。ヘリコバクター・ピロリは通常の細菌の培養のように2〜3日ではコロニーを形成しない。48日間培養による34回目の失敗後、35回目の培養がちょうど復活祭をはさんで行われたことが、彼を幸運児に導いたのである。しかし、最も重要なことは、彼の発見が偶然のみで行われたのではないことである。彼の共同研究者であった Goodwin が本書の中で述べているように、それは計画された偶然であった。Marshall が研修していた

Royal Perth 病院では、ヘリコバクター・ピロリ発見の基盤となる胃の細菌についての病理学者、細菌学者の連携が既にできあがっており、Marshall らはそれをベースに彼の伝説を証明することができたのである。本書の第1章で述べられているこのような迫力のあるヘリコバクター・ピロリ発見のストーリーを読むだけでも本書を購入する価値が十分あると言える。

本書は、過去10年間のヘリコバクター・ピロリ研究の集大成の書であり、世界の一流の研究者たちがチームワークよく実にわかりやすく、最新の研究成果について解説を加えている。内容は、Goodwin による序説に始まって、疫学、病態生理学、消化性潰瘍における役割、胃癌における役割、診断、治療、結論の各章に分けて記載されている。どの章も独立して記載されているので、興味のある章から読み進めていくことが可能である。例えば、Chen と Lee によって記述された“ワクチンの可能性とその見込み”の章は、これま

でわが国の研究者によって報告されたことのない分野であり、この章を読むことによってヘリコバクター・ピロリの感染自体が生体の免疫機構から説明しにくい特殊なものであることが理解でき、それでもなおワクチンへの研究の試みが行われ少しずつ進歩がみられることに驚きを感じると共に、科学のすばらしさを再認識させられるに違いない。

本書の翻訳は、自治医大の木村健教授を中心に消化器内科の若手の先生がゴールデンウィークを返上して極めて短期間のうちに完成しており、本書のような up to date の内容の本にふさわしい仕事と思われる。殊に、実際の仕事を行った谷口君と佐藤君はヘリコバクター・ピロリの研究者としても優秀な医師であり、訳も平易で理解しやすいことをつけ加えたい。

● A5 頁224 図32 写真7 1994
4,120円(税込)

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)